

講演会から

演題 山梨の風土に刻された災害の宿命



講師 竹林征三さん

1943年大阪府出身。京大大学院修士課程修了後、旧建設省入省。甲府工務事務所長、土木研究所ダム部長、環境部長、地質官などを歴任。富士常葉大環境防災学部と同大大学院教授。現山口大時間学研究所客員教授。

どの河川改修で築造されるなど、その重要性は全国的に認識されている。

では、なぜ富士川に集中したか。富士川は全国的にも珍しい本川(本流)にダムのない川だ。支流には広瀬ダムや雨畑ダム、大門ダム

歴史的な河川文化施設でもある。だが、現在は富士川にある、いくつもの霞堤の開

口部が閉められてしまい、連続堤になっているのは残念なことだ。地元でも、その機能が忘れられようとして

「九つの災害」

一方、日本列島は豪雪、豪雨、台風、火山、地震、津波(山津波)、土砂災害、水不足、洪水の「九つの災害」の宿命を背負っている。

四方を山に囲まれた山梨県は、これらの災害が凝縮した地だといえる。江戸時代以降の記録にも、笛吹川や釜無川が度々氾濫し、水害が絶えなかったことが記されている。

とりわけ被害が甚大だったのが明治40(1907)年の大洪水で、笛吹川に造られた堤防が10きにわたって決壊し、大きな被害をもたらした。

阪神淡路大震災や東日本大震災以降、日本は巨大災害の世紀に突入したと言ってもいい。山梨県の周りでも、震度6強を観測した静岡

岡県東部地震や伊豆大島の豪雨、甲府盆地を孤立させた先の豪雪など、これまでになかった大災害が次々に起きている。

われわれに今、必要なのは、山梨の風土に刻まれた災害の宿命をたどり、先人の知恵から学ぶことだ。特に集中豪雨や巨大台風による洪水が各地で発生する近年、霞堤の機能を再評価し、防災に生かすことが重要だと考えている。

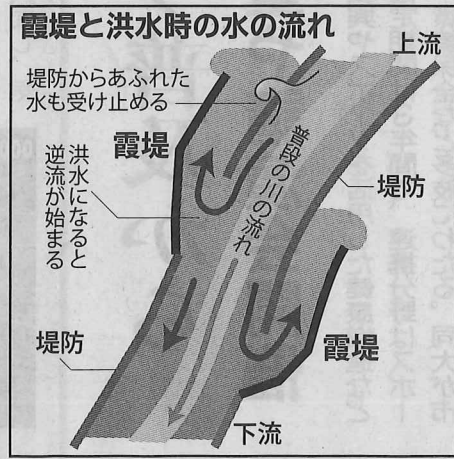
先人の知恵に学ぶ 霞堤の機能再評価

洪水調節

(信玄堤の築堤工法にも取り入れられている)「霞堤」は信玄独自の知恵と言っている。洪水時には水の勢いを抑え、上流の堤防が決壊した場合も氾濫水を河川に戻す構造なので、それ以上氾濫を拡大させない、洪水調節機能がある重要な治水

施設である。現在も日本にある109の1級河川のうち、半分にあたる54水系、63河川に設置されている。このうち最も設置個所が多いのが富士川の68カ所、次いで天竜川59カ所、信濃川47カ所であり、全国の河川にある霞堤のルーツはまさに富士川だといえる。近代以降も、石狩川、鬼怒川な

などがあるが、本川にはない。理由は、富士川の地質や地形などの自然環境は厳しく、さらに河床堆積層が厚いため、日本の近代土木技術を駆使してもダム建設が難しかったからだ。しかし、霞堤なら造ることができた。信玄の時代から現在に至るまで、富士川の治水機能を果たしている霞堤は、



【霞堤】武田信玄によって考案されたといわれる河川堤の一つ。甲府河川国道事務所によると、漏斗(ろうとう)状に上流側に開いている開口部を設け、洪水時には本流からあふれた水を霞堤内へ導き水量や勢いを抑制した堤防。堤防が川の流に沿って造られた現在の連続堤と異なり、洪水の発生しやすい地点だけに設置された不連続堤。命名理由は諸説あるが、開口部が続く個所では堤防部分が折り重なり、霞がたなびくように見えたから、とも言われる。

TEL 055 237 8121 FAX 055 237 8142